

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



19

よろこびの知らせ
第19集

目 次

すべての人の主	1
使徒 10:30-36	
慰めの子、バルナバ	10
使徒 11:19-26	
教会の祈り	19
ヨハネ 20:24-29	
聖霊の導き	28
使徒 13:1-3	

ここに収められたメッセージは、2021年3～4月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

すべての人の主 使徒 10:30-36

10:30 するとコルネリオがこう言った。「四日前のこの時刻に、私が家で午後三時の祈りをしていますと、どうでしょう、輝いた衣を着た人が、私の前に立って、

10:31 こう言いました。『コルネリオ。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられている。

10:32 それで、ヨツパに人をやってシモンを招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれている。この人は海べにある、皮なめしのシモンの家に泊まっている。』

10:33 それで、私はすぐあなたのところへ人を送ったのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております。」

10:34 そこでペテロは、口を開いてこういった。「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、

10:35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられるのです。

10:36 神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

福音は「エルサレム」で始まり、「ユダヤとサマリヤの全土」に広がり、やがて「地の果て」（全世界）に届けられるようになりました。「使徒の働き」はそのことの記録です。「使徒の働き」の全体は「エルサレム」、「ユダヤとサマリヤ」、「地の果て」という順序で三つに分けることができます。第一部（1～7章）「エルサレム篇」、第二部「ユダヤ・サマリヤ篇」（8～12章）、第三部「地の果て篇」（13～28章）というわけです。

一、コルネリオを訪ねたペテロ

きょうの箇所は、「使徒の働き」の第二部「ユダヤ・サマリヤ篇」に属するのですが、これは第三部「地の果て篇」の前触れともなっています。ここでローマからカイザリヤに派遣されていたコルネリオという百人隊長がイエス・キリストを信じ、救われ、聖霊とバプテスマを受けているからです。「イタリヤ隊」と言うのですから、彼の部隊はイタリヤ人で構成されており、隊長である彼もイタリヤ人だったのでしょう。「コルネリオ」はイタリヤによくある名前です。福音が彼に届けられたのは、やがてそれがローマに届き、ローマから地の果て、世界中に伝えられるようになることを予告するかのようです。

コルネリオは異邦人でしたが、ユダヤの人々が信じるまことの神を信じていました。2節で彼は「敬虔な人」と呼ばれています。コルネリオがユダヤ人にまさって敬虔な人であったことはその通りなのですが、この「敬虔な人」というのは、割礼を受けてユダヤ人になることはなくても、まことの神を信じて、御言葉を聞き、神に祈る人々のことを指しました。コルネリオも毎日の祈りを欠かさない人でした。彼はある日の祈りの時、はっきりと神のお告げを聞きました。それは、カイザリヤから南に35マイルほどのヨッパの町にいるペテロを招くようにというものでした。コルネリオはすぐにヨッパに使いをやりました。今なら1時間ほどで行ける距離ですが、当時は歩いて12時間はかかりました。コルネリオの使いは途中

一泊して翌日ヨッパに着き、お昼ごろペテロのいた家に向かっていました（1-8節）。

ペテロのほうはといえば、その日の正午の祈りの時、不思議な幻を見ました。それは、天から大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来る幻でした。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などが入っていました。そして、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声がしたのです。ユダヤの人たちには食べてはいけない動物がありました。それでペテロは、「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません」と答えました。すると、天からの声がこう言ったのです。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」同じ幻が三度もあり、ペテロは、この幻の意味を考え込んでいました。コルネリオの使いがペテロを訪ねてきたのは、ちょうどその時でした（9-20節）。

ペテロはカイザリヤに行くようにと聖霊の示しを受け、翌日カイザリヤに向けて出発しました。途中で一泊して、その翌日の午後、コルネリオの家に到着しました。ユダヤ人が外国人の仲間になったり、その家を訪問したりするのは、律法にかなわないことと考えられていました。ペテロがコルネリオを訪ねるのは勇気と決断の要ることでしたが、それを促したのが、ペテロが見た幻でした。ペテロはそれによって信仰においては、ユダヤ人も異邦人も区別がないことを示されたのです。すべて

を導いておられる摂理の神は、ユダヤ人で福音を語るペテロにも、異邦人で福音を聞くコルネリオにも、具体的な導きを示し、この二人を出会わせてくださったのです（21-23節）。

神は、今も、同じことをしてくださいます。ですから、私たちは「神を求める人、福音に耳を傾ける人に出会わせてください」と祈る必要があります。その時、神は、私たちのところに求める人を送り、また、私たちを福音を聞きたいと願う人のところに導いてくださるでしょう。日系二世の豊留真澄先生は、同胞に伝道する難しさを身をもって体験しました。しかし、どうしても、この人たちが世を去る前に福音を伝えたいと願い、「心と心の伝道」という伝道方法をあみだしました。その中で先生は「伝道は祈りから始まる」と教えています。ピリポがエチオピアの役人のところに導かれ、ペテロがコルネリオのところに導かれたように、私たちも神の導きを祈り、それに従いたいと思います。

二、ペテロを迎えたコルネリオ

コルネリオの家についてペテロは「そこで、お尋ねしますが、あなたがたは、いったいどういうわけで私をお招きになったのですか」（29節）とききました。コルネリオは、四日前の出来事をそのままペテロに語りました（30-32節）。それだけではなく、こう付け加えました。「いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております。」（33節）

コルネリオはペテロの到着を待つ四日間を無駄にしませんでした。「コルネリオは、親族や親しい友人たちを呼び集め、彼らを待っていた」のです（24節）。この時代には電話などありませんから、いつペテロが到着するか分かりませんでした。人々は忍耐深く待ちました。御言葉を聞くために集まったのです。

カリフォルニアでは、毎夏、サンタバーバラにあるウェストモント大学で日本語のリトリートをしていました。各地の教会から集まりますので、毎年200名から300名ほどの参加者がありました。あるセッションで私がメッセージをして講壇を降りると、すぐに、ひとりの教会のメンバーがやってきて、こう言いました。「先生、とてもいいメッセージでした。きょうのような話を教会でもしてくださいよ。」実は、そこで話したメッセージは、しばらく前に教会で話したものに手を加えたものだったのです。同じような話は教会で何度もしており、その人も聞いていたはずなのですが、その人はまるで始めて聞いたかのようにして感動したのです。私は、この人に御言葉が届いたことを喜びましたが、それと同時に御言葉が届くためには準備が必要なことを学びました。四日間のリトリートに出席するには早くから日程を確保し、旅費や参加費をセーブしておかなければなりません。また教会をあげてリトリートの祝福を祈り、期待して集会に出ます。そしてリトリートでも朝早くから祈りが捧げられます。そうした備えのあるところに聖霊が働き、神の言葉がその力を表すのです。

私たちも御言葉を聞くのに、祈って備え、「神の御前
に出ています」という姿勢で御言葉に向かいたいと思
います。神はそのような人々に語ってくださるのです。

三、すべての人の主

ペテロは、コルネリオの返事を聞いて、こう言いま
した。「これで私は、はっきりわかりました。神はかた
よったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐
れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられる
のです。神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝
え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。
このイエス・キリストはすべての人の主です。」（3
4-36節）ペテロは、コルネリオの家に集まった人々を見
て、イエスはユダヤ人のためだけの救い主ではない、す
べての人の救い主、すべての人の主であることをほんど
うに理解したのです。

もちろん、ペテロはイエスがすべての人の主であるこ
とを知っていました。彼はユダヤの最高法院で尋問を受
けた時、イエス・キリストを証して「この方以外に
は、だれによっても救いはありません。世界中でこの御
名のほかには、私たちが救われるべき名としては、ど
のような名も、人間に与えられていないからです」（使徒
4:12）と言っています。イエス・キリストの御名だけがす
べての人を救うということは、イエス・キリストがすべ
ての人の主であるということです。しかし、「すべての
人」の中に異邦人が含まれることは、頭で理解してい
ても、まだ実際には体験していませんでした。今、カイザ

リヤに来て、「すべての人」の中に、コルネリオという、まったくの異邦人が含まれていることを、ペテロは実際の体験として知ったのです。

ペテロは続いてイエス・キリストの十字架と復活を語り、「信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる」（43節）と語りました。すると、人々の上に聖霊がくだり、人々は聖霊に導かれるままに賛美を歌い始めたり、異言を語り出したりしました。このようなしるしは、人がキリストを信じるときにいつでも起こることではありません。しかし、当時、ユダヤ人と異邦人との壁はとても厚いものでしたから、異邦人にも信仰によって聖霊が与えられることがしるしとして示される必要があったのです。後にペテロは、異邦人のところに行ったことについて非難を受けました。とりわけ、「ユダヤ主義者」といって異邦人がクリスチャンになるには、まず、割礼を受けてユダヤ人になってからでなければならないと主張する人から攻撃されました。そのとき、ペテロはコルネリオのことを話して、ユダヤ人であっても異邦人であっても、人が救われるのは信仰によってであることを証ししました（使徒11:15-17）。生きた証しが真理を明らかにし、無益な論争に決着をつけるのです。

イエス・キリストが「すべての人の主」であることが、いちばんよく分かるのは、このように、福音の宣教を通してです。宣教の物語を読むと、どの国の人々も、イエス・キリストの福音によって生活が変わり、人生が

変わり、国も民族も変えられていったことを見ることが
できます。私の友人にアメリカにいるイラン人に伝道し
ている人がいます。あるときバプテスマのためバプテス
トリーをお貸ししたことがあります。そのバプテスマ式
で、ある人は英語で、ある人はペルシャ語で信仰の証し
をしました。ムスリムがクリスチャンになるのは大変な
ことだと思いますが、この人たちは、イエスを信じた喜
びを表情と言葉で証ししていました。私は、そこに参加
して、「イエス・キリストはすべての人の主」であるこ
とを実感することができました。

この人にはイエスはいらないという人はいません。文
字どおり「すべての人」にイエス・キリストが必要です。
私は、こどもや大人、学生や会社員、主婦や年老いた
人、健康な人や病気の人、さまざまな背景を持った人た
ちが、イエス・キリストによって救われていくのを見て
きました。アメリカでは母国や言語の違った人々が救わ
れて共にイエス・キリストを讃える美しい光景を何度も
見てきました。イエス・キリストは「すべての人の主」
です。福音がさらに多くの人々に伝えられ、その人たち
もコルネリオのように御言葉に耳を傾け、救われ、バプ
テスマを受け、聖霊によって生かされていくのもっと
見たいと思います。そして、多くの人たちと共に「イエ
ス・キリストはすべての人の主です」と告白し、イエ
ス・キリストを崇めたいと思います。

(祈り)

主イエス・キリストの父なる神さま、今では、あたり

まえになっている異邦人の救いも、最初にそのことがなされるにあたっては、大きな障壁がありました。しかし、あなたは、ユダヤ人であるペテロをも、異邦人であるコルネリオをも共に導いてくださいました。ペテロはその導きに従って行動し、コルネリオも御言葉を聞く備えをしました。私たちにも、そのような従順で柔和な心を与え、あなたの導きに応える者としてください。私たちに多くの人々の救いを見せてくださり、おひとりの救い主イエス・キリストを共に崇めることができるようにしてください。イエス・キリストのお名前です。

慰めの子、バルナバ

使徒 11:19-26

11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。

11:20 ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。

11:21 そして、主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った。

11:22 この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。

11:23 彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

11:24 彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた。

11:25 バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、

11:26 彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

私たちが今学んでいる「使徒の働き」は、使徒たちが行ったことを書いていて、ペテロやパウロが中心人物となっています。しかし、ペテロやパウロだけが宣教の働きをしたわけではありません。多くの人が福音の宣教にかかわっています。7章には最初の殉教者となったステパノ、8章にはサマリヤの人々やエチオピアの役人に福音を伝えたピリポ、9章にはサウロにバプテスマを授けたアナニヤのことが書かれていました。この後、シラス、テモテ、ルデヤ、プリスキラ、アクラ、アポロなど多くの人

が登場します。「使徒の働き」が「使徒たち」だけの働きではないことがよく分かります。

一、寛大な心 (Generosity)

そうした人々の中で忘れてはならないのがバルナバです。「バルナバ」というのはニックネームです。「バル」は「子」、「ナバ」は「慰め」なので、「慰めの子」という意味です。彼に会う人は皆、彼から出てくる慰めを感じたのでしょう。それで彼を「ヨセフ」という本名で呼ぶ人はなく、皆が「バルナバ、慰めの子」と呼びました。

バルナバの名が最初に出てくるのは使徒 4:36-37 です。エルサレムでは、イエス・キリストへの信仰のゆえにユダヤのコミュニティから追放され、たちまち生活に困るようになった人が出るようになりました。教会は、資産を持っている人たちの献金によって、そうした人たちを援助しました。バルナバも、自分の畑地を売って、その代金を献げました。バルナバは人々に霊的な慰めとともに、物質的なものをも、惜しまずに与える人でした。

聖書は献金についてコリント第二 9:7 でこう教えています。「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」献金は惜しむ心でするものでも、強いられてするものでもありません。それは誰かに指示されたり、誰かを真似てするものでもありません。

使徒 5 章のアナニヤとサツピラ夫妻は、持ち物を売った

代金を「これが全部です」と偽って持ってきました。全部献金しなくても全く問題はなかったのですが、「全部です」と言ったのは、それによって人々から誉められようとしたからでしょう。神はこうした偽善を裁かれました。献金で大切なことは「進んで」することです。バルナバの献金が神に喜ばれたのは、それが代金全部だからではなく、「進んで」、「喜んで」献げられたものだったからでした。

私がアメリカに来て最初に覚えた英語のひとつは“generosity”でした。惜しまずに与えるという意味です。教会の献金やチャリティへの募金など、アメリカ人は、じつに惜しまずに与えます。3月11日の東日本大震災のときにもアメリカ軍は8000万ドルの予算を使って、“Operation Tomodachi”を展開し、いち早く支援をしました。多くのアメリカ人も被災地に募金を送りました。教会やチャリティには献げられた財産を管理して、年金を払うシステムがあります。多くの人が子どもに財産を残すよりは、それを神の働きに用いたいと願ってそうしています。そうしたものが宣教、慈善、教育、福祉を支えています。アメリカが世界で一番多くの宣教師を送り出しているのは、そのような“generosity”のゆえなのです。バルナバはその“generosity”を持った人でした。

二、親切な心 (Kindness)

次にバルナバが登場するのは、使徒9:27です。サウロはダマスコでキリストに出会い、信仰を持ちました。エルサレムに戻り、弟子たちの仲間に入ろうとしたのです

が、サウロはそれまで教会を迫害してきましたので、誰もが彼を警戒して受け入れようとしませんでした。そんなとき、真っ先にサウロを受け入れたのが、バルナバでした。バルナバはサウロの身元引受人になり、「使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコに行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した」のです（使徒 9:27）。サウロは、ダマスコではアナニヤによって、エルサレムではバルナバによって弟子たちの仲間に入り、使徒たちと交わりを持つことができました。

このようにバルナバは他の人に対する親切な心 *kindness* を持っていました。「親切」は、それをする人も、それを受ける人もいっしょにうれしくなれるものです。郵便局や UPS で荷物を両手でかかえている時、たいてい、誰かがドアを開けてくれます。私も、同じようにしてあげると、喜ばれます。そのような親切は簡単にできますが、バルナバがサウロにしたような親切は簡単ではありません。不都合なことが起こってもそれに対処する覚悟や勇気が必要です。バルナバの親切にはそうした愛の力が伴っていました。気持ちがあっても、勇気や力がなくて親切を実行できない時もあります。必要な時に必要な事ができるよう、いつも主からの力を求めていきたいと思います。

サウロはパリサイ人たちから命を狙われるようになったため、「兄弟たち」はサウロを彼の故郷タルソへ逃し

てやりました（30節）。ここで「弟子たち」という言葉が「兄弟たち」に変わっているのに注意しましょう。これは他の弟子たちが、バルバナにならって、「兄弟」としての親切を実行したことを示しています。ひとりの親切はその人だけで終わりません。それは他の人たちにより影響を与えて広がっていきます。ここではバルナバの模範がパウロの命を救ったと言ってよいでしょう。

三、忠実な心（Faithfulness）

その次にバルナバが登場するのは、きょうの箇所です。19節に「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行った」とあります。「ステパノのことから起こった迫害」とは、8:1に書かれているように、使徒たち以外の弟子たちがエルサレムを追放されたことを指します。弟子たちは追放されて流浪の民となりました。けれども、聖書は「フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも“追いやられた”」とは書かず、「進んで行った」と書いています。実際、弟子たちは重く、悲しい気持ちで、エルサレムの去ったのではありませんでした。それを福音を広める機会とし、行った先々で福音を宣べ伝えたのです。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」とは、ほんとうにその通りです（ローマ8:28）。

弟子たちは、最初は「ユダヤ人以外の者にはだれに

も、みことばを語らなかつた」のですが、そのうちギリシヤ人にも主イエスを宣べ伝えはじめました。すると、主の御手が共にあって、ギリシヤ人が大ぜい信じて主に立ち返りました。今までも、エチオピアの役人やローマの百人隊長コルネリオがイエスを信じましたが、この人たちは、異邦人とはいえ、すでに聖書を読み、まことの神に祈る人たちでした。ところがアンテオケで信仰を持ったギリシヤ人は、それまでユダヤ人の信仰とは関わりのなかつた異教徒たちでした。そうした人々もまことの神に立ち返り、イエス・キリストを信じるようになったのです。

この知らせがエルサレム教会に届いたので、エルサレムからバルナバがアンテオケに遣わされました。このころ使徒たちはユダヤの権力者たちによって活動が制限されていたので、バルナバが使徒たちの代理人としてアンテオケに行くことになったのです。バルナバには使徒の代理を務めることができるほどの賜物が与えられており、彼の資質は使徒たちが認めるほどのものでした。しかし、いったんエルサレムを離れたら、バルナバもまた流浪の人々のひとりになるのですから、もうエルサレムに戻ることができないかもしれません。それでもバルナバはアンテオケに向かいました。そして、そこに留まり、人々と生活を共にし、人々を教え導きました。

それは言葉だけの教えや導きではありませんでした。バルナバの人格と信仰が模範となって、アンテオケの教会はさらに大きく、しっかりしたものになっていきまし

た。24 節に「彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた」とある通りです。

キリストを信じる者たちはそれまで「この道の者」(9:2)「弟子」(9:10)「聖徒」(9:13)「仲間」(9:26)「信者」(9:31)と呼ばれてきましたが、アンテオケではじめて「キリスト者」(クリスチャン)と呼ばれるようになりました。人々がそう呼んだのは、「あいつらは、ギリシャやローマの神々を捨てて、『キリスト』、『キリスト』とばかり言っている。キリストのやつらだ」という軽蔑の意味をこめてだったと思われます。けれども、この呼び名は、アンテオケの信仰者たちが、一にも二にもキリストの御名を呼び、キリストの御名を伝えたことを表しています。エルサレムからユダヤ・サマリヤ、さらに地の果てへと福音が広がり、それがユダヤ人からギリシャ人へと伝えられるようになっても、福音の中身は何一つ変わりませんでした。キリストが宣べ伝えられ、キリストが信じられ、キリストが礼拝されました。そして、その背後に福音の真理に忠実なバルナバの働きがありました。

バルナバは素晴らしい人物で、多くの人に尊敬されています。信仰のヒーローを持つことは決して悪いことではありません。私は歴史上の人物の伝記や著作を読んでどれほど感動し力づけられてきたか分かりません。しかし、私たちの目は、やはり、人ではなく、キリストに向けられなければなりません。バルナバの generosity, kind-

ness, faithfulness はすべて神から来たもの、キリストが聖霊によって与えたものです。私たちはそれをバルナバから受け取るのではなく、神から、キリストを通して、聖霊によって受け取るのです。

私は、最初に、「使徒の働き」は使徒だけでなく、多くの人が福音宣教のために働いた記録であると言いましたが、じつは、「使徒の働き」は人々の働きだけではなく、キリストの働きの記録なのです。「使徒の働き」の初めに「テオピロよ。私は前の書で、イエスが行ない始め、教え始められたすべてのことについて書き…」とあります。前の書というのは「ルカの福音書」のことです。「使徒の働き」はルカの福音書の続編です。ですから、ルカは、イエスが福音書で「行い始め、教え始められた」ことを「使徒の働き」でも引き続き行っていると述べているのです。

私たちもバルナバのように、人々を温め、励まし、力づける者になりたい、「慰めの子」でありたいと思います。そのために、慰めのみなもとである神にもっと信頼したいと思います。神こそ、寛容で寛大、慈愛と親切に満ち、真実で忠実なお方です。「慰めの父」に信頼する者が「慰めの子」になれるのです。バルナバが示した親切、寛大さ、忠実さは、ガラテヤ 5:22-23 で「親切」、「善意」、「誠実」という御霊の実として表されています。バルナバを用いてくださった神は今も、私たちを用いてくださいます。バルナバと共におられたキリストは、変わることなく、私たちと共におられます。バルナ

バを満たした聖霊は、今も私たちを「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」で満たしてください。そのことを信じて、バルナバの模範になりたいと思います。バルナバを通し、より主イエスに目を向けたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、私たちに良き信仰の模範、バルナバを与えてくださり感謝します。私たちは彼の寛大さ、親切、忠実さにとても及ばないものです。だからといってあきらめません。イエス・キリストを仰ぎ見て、私たちも神の子、「慰めの子」として成長することを願い求めます。あなたに信頼する私たちに、聖霊の実を結ばせてください。主イエスのお名前です。

教会の祈り 使徒 12:1-5

12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、

12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

12:3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕えにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。

12:4 ヘロデはペテロを捕えて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。

12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

きょうの箇所は5節は、原文では、「祈りが教会によってささげられていた」とありますが、日本語では、「教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた」と訳されています。「人々が教会で祈っていた」というのなら、誰もが使う表現ですが、ここでは、「教会は祈っていた」と言われています。この表現は、私たちに、祈りについて、いくつかの大切なことを教えてくれます。きょうは、そのことを学びましょう。

一、祈りの家

まず、第一に、この言葉は、教会が祈りの家であることを教えています。

イザヤ 56:7 に「わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ」とある通り、旧約時代、神殿は「祈りの家」と呼ばれていました。ところが、イエスの時代

には、神殿が巡礼に来る人々を相手に商売をする場所になっていたのです。イエスは、鞭をふるって商売人を追い出し、「宮清め」をなさったのです（マルコ 11:17）。

アメリカでは地域の必要に答えて、教会は様々な用途に用いられます。私の知っている教会では、毎2回、駐車場が、市のリサイクル・イベントに使われます。また、今年のウィンター・ストームでは避難所になりました。私がコロナのワクチン接種を受けたのは、St. Philip Methodist Church という教会でした。教会で、さまざまなイベントやバザーが行われたとしても、それがちゃんとした目的をもってなされるなら、決して悪いことではありません。しかし、教会から祈りが消えて、そこが単なるソーシャルの場やイベント会場になってしまうとしたら、それは聖霊を悲しませると思います。

日本では、カラオケ会場でコロナウイルスに感染する人が多いので、いくつかの教会では、礼拝のとき、賛美を小さな声で一節だけしか歌わないようになったそうです。人々が教会で大きな声で歌っているのを聞いて、「カラオケをやっている」と誤解されないためなのだそうです。一般の人々は教会をイベントの会場だと考えていたとしても、私たちは、教会が、まず、何よりも、そこで祈りがささげられる「祈りの家」であることを覚えていたいと思います。

使徒 2:42 に「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」とあります。ここで「堅く守り」と訳されている言葉には、

「専念する」という意味があります。しかも、この「専念する」という言葉は、「使徒たちの教え」だけでなく、「交わり」、「パン裂き」、そして「祈り」のすべてにかかります。つまり、教会は、そのはじまりの時から「使徒たちの教え」と「交わり」と「パン裂き」、そして「祈り」に専念していたのです。この四つは、弟子たちが選んだことではなく、キリストによって教会に与えられた使命ものです。教会は御言葉を聞き、祈り、聖餐を共にして交わる場です。人々は祈るために教会に集まり、集まったときには、かならず祈りました。人々は主の名を呼んで祈りました。

それで、弟子たちは「御名を呼ぶ者たち」と呼ばれました（使徒 9:14、9:21）。弟子たちは自分たちを「祈る者」、教会を「祈りの家」と考えました。祈りは、弟子たちのアイデンティティであり、教会のしるしでした。今日の私たちも、「教会は祈りの家」、「クリスチャンは祈る人」であることを人々に知ってもらえるようになりたいと思います。

私たちが内面に抱えている課題や、人生の様々な問題は、最終的には祈りによって神のところに持っていく以外に解決できないものが多くあります。そのような時、人々が神を求め、祈るために教会に来るようになって欲しいと思います。「私のために祈ってください」と、教会の祈りを求めるようになって欲しい、祈りによって解決を見て、神を信じ、キリストに従う者となって欲しいと、心から願っています。

二、一致した祈り

次に、「教会は祈っていた」という言い方は、みんなが心を合わせ、一致して祈ったことを表しています。教会はそれまでは宗教指導者たちから迫害を受けていました。ところが、今回は、紀元 41 年にユダヤの王となったヘロデ・アグリッパ一世から迫害を受けました。彼は、生まれたばかりのイエスを殺害しようとしたヘロデ大王の孫で、ヘロデー族はバプテスマのヨハネを殺し、イエスを十字架に追いやり、今、十二弟子のひとりヤコブを殺し、ペテロを殺そうとしていました。こんな大変なときには、教会のだれひとりももれることなく、こぞって、熱心に祈ったことでしょう。そのことが、「教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた」という言葉に表されています。

祈りには、一定の法則が見られます。まず、悔い改め、へりくだる祈りに、神は耳を傾けてくださいます。ダビデ王は自分の罪を心から悔い改めて祈ったので、赦しを受けました。ダビデはその体験から、「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません」と言っています（詩篇 51:17）。ヨシヤ王は預言者から神の言葉を聞いたとき、心を痛め、神の前にへりくだりました。それで神はヨシヤに「あなたは心を痛め、神の前にへりくだり、わたしの前にへりくだって自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる」と語ってくださいました（歴代誌第二 34:27）。

イエスは、「パリサイ人と取税人の祈り」のたとえで、パリサイ人の「立派な」祈りではなく、取税人の「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」という祈りが神に受け入れられたと言っておられます（ルカ 18:10-14）。また、熱心に、あきらめずに祈る祈りや、神が聞いてくださると信じて祈る祈りが聞かれることがなどが、聖書に教えられています。

それと同じように、人々が心を一つににして祈るなら、その祈りは聞かれることも約束されています。イエスはマタイ 18:19 で、こう言っておられます。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」これは、イエスの約束ですから、これ以上に確かなことはありません。二人、三人が心を一つにして祈れば、それが聞かれるとしたら、もっと多くの方が心をひとつにして祈るなら、どんなに大きなことが起こることでしょうか。以前、ペテロとヨハネがユダヤの指導者たちの尋問を受け、「イエスの名によって語ってはならない」と脅かされたうえで釈放されたことがありました。そのとき、弟子たちは「心を一つにして」祈りました（使徒 4:24）。すると、祈っていた場所が震え、一同は聖霊に満たされ、大胆に神の言葉を語るようになりました。一つになって、心を合わせて祈る祈りを神は聞いてくださいます。それは祈りの法則で、この法則に従う者を、神は喜んでくださいます。

三、祈りの力

さて、教会のみんなが心を合わせて祈った祈りは、どのような結果をもたらしたのでしょうか。ペテロは鎖につながれたうえ、四人一組みの兵士四組によって監視されていました。一組が六時間づつ、四交代でペテロを牢獄に閉じ込めていたのです。しかし、人間のどんな力も、神の前には無力です。ペテロは御使いに導かれてやすやすと牢獄から出ることができました。ペテロ自身も信じられないような出来事で、ペテロは夢を見ているのだと思ったほどでした。ペテロは牢獄を出て、すぐに、人々が集まって自分のために祈ってくれている家に行きました。ドアを叩く音がしたので、ロダという召使いが行ってみるとペテロの声だったので、人々に「ペテロ先生が来ています」と言いましたが、人々はロダの言葉を信じませんでした。彼らはペテロの救出のために祈っていたのですが、神が、こんなにも早く、超自然の仕方でペテロを救い出してくださるとは、考えていなかったのです。人々は、自分たちの祈りをはるかに超えてみわざをなしてくださる神に、どれだけ感謝したことだろうかと思います。祈りは聞かれるのです。しかも、それは、しばしば、私たちの思いをこえたものです。

これはアフリカのある小さな村の診療所で働いていた宣教師が実際に体験した話です。彼は、二週間おきに町まで生活物資や診療所で使う薬の買出しに行っていました。町に出て再び村に帰るのに二日かかり、途中、野宿をしなければなりません。この宣教師がいつも決

まって町に買出しに行くのを知っていた町のならず者たちが、宣教師を襲って、金品を奪おうとしました。寝込んでいる宣教師を見つけて襲おうとしたのですが、宣教師の周りに二十六人の護衛がいるのを見て、彼らは勝ち目がないと思って逃げ出してしまいました。この宣教師は、町に行った時、そのならず者のひとりがけんかをして怪我をしているのを見て、その手当てをしてやっているときに、そのことを聞いたのです。もちろん、宣教師には護衛などだれひとりいません。宣教師は、この不思議な出来事はきっと神の守りに違いないと確信して、神に感謝しました。このことがあって、しばらくして宣教師は帰国して、ミシガンの自分の教会で、この話をしました。すると、ある男性が興奮して「それはいつ起きたのですか」と尋ねました。すると、その男性は、その時間をアメリカの時間に換算して、「あなたがならず者に襲われそうになったちょうどその時間に、私たちはあなたのために祈っていました」と言いました。そして、彼は皆に向かって言いました。「その時、一緒に祈っていた人は、皆ここに来ているはずです。立ってください」と言いました。宣教師が立ち上がった人を数えたら、なんと二十六人でした。宣教師をガードしていた二十六人の護衛の数と同じだったのです。一同は、神が人々の祈りを用いてくださったことを確信し、大いに神を賛美しました。

このような証しは、祈りを大切にしている教会では、どこでも見られると思います。

よく、「私には祈ることしかできませんが…」と言われることがあります。私は、そんな時いつも「祈りが一番大切なのです。他のどんなことよりも、祈って欲しいのです」と答えます。英語で covet という言葉には「他人の物などをむやみに欲しがる」という意味があつて、聖書はそれを戒めているのですが、ひとつだけ例外があります。それは、祈りについてです。パウロの手紙を読むと、いたるところで「祈ってください。私のために祈ってください」と人々にねだっています。私も、英語で手紙を書く時、“May I covet your prayer?” と書くことがあります。他の人に祈ってもらい、また、自分も他の人のために祈る。これこそが、信仰者だけにできる特権、祈りのまじわりです。

祈りには力があります。なぜなら、それは全能の神に届くからです。祈りは必ず聞かれます。祈りを聞いてくださる神は恵み深いお方だからです。皆さんは、イエスを信じ、まことの神に祈る生活を始めていますか。教会で、一緒に祈ることを学び、実行していきましょう。このような祈りが聞かれる。こうすればよいということを知っていても、実行しなければ、いつまでたっても、祈りの力を体験することはできません。きょう教えられたことを実際にやってみましょう。そして、神の御業を見て、神を大いにほめたたえましょう。

(祈り)

私たちの祈りを聞いてくださる、父なる神さま。あなたは、私たちに、「あなたがたがわたしを呼び求めて歩

き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。
もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう」と語っておられます。あなたの言葉の通り、あなたを呼び求め、あなたを捜し求める者としてください。また、そのような人を、多く起こしてください。そして、この場所を、ここから、あなたへの祈りが、香のかおりのように立ち上るところとしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

聖霊の導き 使徒 13:1-4

13:1 さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。

13:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。

13:3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。

13:4 ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。

「使徒の働き」は大きく三つに分けることができます。1～7章には「エルサレムでの伝道」、8～12章には「ユダヤ・サマリヤでの伝道」、13～28章には「地の果てまでの伝道」が記されており、使徒13章は、「地の果てまでの伝道」の第一歩として、バルナバとサウロが最初の伝道旅行に出かけたことが、書かれています。きょうは、聖霊の導きについて学ぶのですが、その前に、バルナバとサウロが、そこから遣わされたアンテオケ教会のことを少し見ておきましょう。

一、アンテオケ教会

アンテオケはエルサレムから直線で400マイル北にある町で、現在ではトルコに属し「アンタキヤ」と呼ばれています。この町に教会ができたいきさつは、使徒11:19-26にあります。

アンテオケの教会にはバルナバ、サウロの他に、シメオン、ルキオ、マナエンといった指導者がいました。アンテオケ教会は、さまざまな面で神の祝福を受けていましたが、その中でも、最も大きな祝福は、良い指導者に恵まれていたことでした。物事を成し遂げるには、「物資」や「お金」、それらを活用するための「方策」などが必要だと言われます。これらは、英語では、「M」で始まる言葉、material, money, method で表すことができますが、こうしたものよりもっと大切な「M」で始まるものがあります。それは man、「人材」です。それで、どの企業でも、人材を確保するために努力し、多くの人件費を使っています。それは、一般のビジネスだけでなく、教会のミニストリーでも同じです。神は、物資や金銭、方策よりも、人を用いて物事をなされます。エルサレム教会で、問題が起こったとき、教会はどうしたでしょうか。どうやって問題を解決するかという方策を話し合ったのではなく、七人の「聖霊と知恵と信仰に満ちた人」を選びました。問題を解決するのが「方策」よりも、「人」だからです。

1節に名前があるシメオンは「ニゲル」とも呼ばれています。「ニゲル」というのは「黒い」という意味のラテン語です。ローマ帝国はアジアとヨーロッパだけでなく、地中海に面する北アフリカをも領土にしている、そこでは、ローマの文化が行き渡り、ラテン語が使われていました。シメオンの先祖は北アフリカ出身だったのでしょう。

次に名前の上がっている「ルキオ」は「クレネ人」で、彼の先祖も北アフリカのクレネの出身でした。使徒 11:20 に「ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた」とありますが、この「幾人かのクレネ人」のひとりがルキオだったと思われます。

三人目のマナエンは「国主ヘロデの乳兄弟」と言われています。この「ヘロデ」は、ヘロデ大王の息子のひとり、ヘロデ・アンティパスのことです。「乳兄弟」というのは、宮廷で王子を育てるとき、臣下の同年齢の子どもを王子の兄弟がわりに一緒に育てるといった慣わしがありました。マナエンは、成人するまで、ヘロデ・アンティパスと一緒に、ヘロデの宮廷で育ったのでしょう。アンティパスは、バプテスマのヨハネを殺害し、イエスを侮辱した人物になりましたが、マナエンはイエスの弟子となり、主の教会に仕える者となりました。同じ環境で育っても、アンティパスは物質的には恵まれていても、神から離れ、神からも見捨てられた惨めな生涯を送りました。けれどもマナエンは、迫害によって目に見えるものは失っても、神に愛され、神を愛する豊かな生涯を送りました。多くの人には、持って生まれた素質によって人生の大部分はすでに決められている、また、その他の部分は生まれ育った環境によって決まると信じていますが、決してそうではありません。その人がどのような人生を送るかを決めるのは、その人が何を選ぶかにより

ます。キリストへの信仰を選ぶのか、不信仰を選ぶかによるのです。若者たちへのアドバイスに、“Choose Christ.”（キリストを選ぼう）という言葉がよく使われます。しかし、これは、年齢に関係なく、すべての人に、どんな場合でも、当てはまるアドバイスだと思います。何かの決断をするとき、それはキリストに信頼することに基づいているだろうか、また、イエスに従うことになるのかを考えて、選びましょう。信仰の選択が、この世においては幸いな人生を、世を去ったのちは永遠の幸いをもたらすのです。私たちは、多くの人が、キリストを選び、この幸いを見出すよう、心から祈っています。

二、聖霊の導きと祈り

さて、きょうの本題に入りますが、聖書はアンテオケ教会のキリスト者が、共に集まり、断食をして祈っているときに、聖霊の導きがあったと書いています。聖霊の導きが祈りのうちに示されたのです。

聖霊の働きと祈りとは切り離せないものです。しかも、心を合わせ、ひとつになり、熱心に祈る祈りを通して、聖霊は働かれます。使徒 1:14 に、「この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた」とあるように、弟子たちは、ペンテコステの日を迎えるまで九日の間、祈りに専念しました。そして聖霊を受けました。

使徒 4:24-31 には、人々が「みな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて」祈った結果、一同が「聖霊に満

たされ、神のことばを大胆に語りだした」とあります。祈りが人々にイエス・キリストを証しする力を与えました。

使徒 10 章には、コルネリオに天使が現われて、彼に、「ペテロを招きなさい」と告げたのは、彼が祈っていた時だったとあります。コルネリオは、すぐに三人の使いをペテロのところに送りました。彼らがペテロのいた家の戸口に立ったとき、聖霊がペテロに語りかけました。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」(19-20 節) 聖霊がペテロ導いたのも、ペテロが祈っていた時でした。このように、聖霊の導きは祈りの中で与えられてきました。それは、今も変わりません。聖霊の導きは、それを求めて真剣に祈る人に、必ず与えられます。

使徒 12:25 に、「任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た」とあります。この「任務」というのは、飢饉にみまわれたエルサレム教会に救援物資を届けることでした。バルナバとサウロがその任務にあたりました。ふたりは、アンテオケとエルサレムとを往復する間に、この旅行が終わったら、アンテオケからさらに西に足を伸ばして伝道旅行に行こうと話しかけたのかもしれませんが。しかし、そういったことは軽々しく決めてよいことではありませんので、ふたりは教会に帰ってから、そうした

考えを人々に話し、導きを待ちました。そのことについてさまざまな意見が出たことでしょう。しかし、ふたりは、人々の意見だけで物事を決めることをしないで、聖霊の導きに委ねました。その導きを得るため、皆で祈ることを提案しました。2節の「彼らが主を礼拝し、断食をしていると…」とある、「彼ら」は、教会全体を指しています。教会の全員が聖霊の導きを求めて祈りに専念しました。聖霊は、その祈りに答えて、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」という明確な導きをくださったのです。

これは私たちにも当てはまります。私たちは、何か、決定しなければならないことがあった時、できるかぎりの情報を集め、人からのアドバイスをもらいます。情報を集めることも、アドバイスをもらうことも良いことです。しかし、最終的に物事を決めるときには、静かに祈り、落ち着いて聖霊の導きを求めることが信仰者には必要です。自分で結論を出すのではなく、「聖霊が導かれるなら、それに従います」という、謙虚な心で祈るとき、信じる者の内にいてくださる聖霊が、確かな導きを与えてくださるのです。

三、聖霊の導きと教会

聖霊は祈りを通して導きを示してくださることを学びましたが、次に、聖霊が教会を通して導きを示されるということを考えてみましょう。

3節では「彼らは…ふたりを…送り出した」とありますが、4節では「ふたりは聖霊に遣わされて」とあります。

バルナバとサウロは、伝道旅行に、教会によって送り出され、聖霊によって遣わされています。これは、聖霊と教会がひとつになって、その働きをしていること、また教会が、聖霊のエージェントとして用いられていることを言い表しています。同じような表現は、使徒 15:28 にもあります。そこには、「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました」と書かれています。「聖霊と私たち」というのも、聖霊と教会がひとつのもの、また、教会が聖霊のエージェントであることを言い表しています。

バルナバとサウロは、教会は聖霊なしには成り立たないものであることをよく知っていましたが、同時に、聖霊が教会を用い、教会を通して働いてくださることもよく知っていました。それで、自分たちに与えられた伝道旅行のビジョンを教会に諮ったのです。ふたりとも、聖霊に満たされた人物で、キリストの使徒でしたから、ふたりでものごとを決めることができたかもしれませんが、自分たちのうちに働かれる聖霊は、他の信仰者にも住まわれていることを信じ、教会を通して、客観的にも聖霊の導きを受け、それに従おうとしたのです。

私たちも同じようでありたいと思います。自分は聖霊に導かれていると思っても、教会に諮って、そのとおりにならないこともあります。すべてのことには時があります。それがみこころにかなうものであったとしても、今はその時ではなく、他のことが優先されなければなら

ないかもしれません。聖霊の導きが、いつでも自分の願いと一致するとは限りません。聖霊が教会全体のことを考慮しておられるように、私たちも、聖霊の導きを確かめるために、「教会」を考慮に入れる必要があります。聖霊の導きは、それが確かなものであれば、同じ聖霊を宿している他の信仰者たちにも、示されるはずですが、同時に、教会は全体として「聖霊の宮」です。ですから、一人ひとりが聖霊の導きを求めて祈るとともに、その祈りを教会の指導者や信仰の仲間にも祈ってもらい、ともに聖霊の導きを求めていくことが、私たちには必要です。そのようにして、私たちは、聖霊の導きを主観的にだけでなく、客観的にも確かめることができ、間違いのない歩みができるようになるのです。

きょうは、聖霊の導きと聖書について話すことができますでしたが、聖書のほんらいの著者は聖霊ですから、聖霊が聖書に矛盾する導きをなさるわけがありません。聖書によって聖霊の導きを確かめることをおろそかにしてはいけません。けれども、私たちは聖書の全部を知ってはいませんし、どんなに優れた人でもひとりの人がすべてを理解しているわけではありません。ひとりよがりになることなく、説教やバイブルスタディを通して、教会が、二千年の歴史を通して蓄えてきた御言葉の知恵、知識に学ばなければなりません。

右に行くべきか、左に行くべきかといった決断が迫られるときは、人生の中でそんなに何度もあるわけではあ

りません。しかし、信仰生活では、毎日、さまざまな場面で、小さな決断が求められるでしょう。そうしたことでも、「聖霊よ、導いてください」と祈り求め、答を得、それに従うことをしていきましょう。そうした日々の決断が信仰によってなされるとき、大きな決断も正しくできるようになります。祈りのうちに聖霊の導きを聞き、教会に助けられ、聖書によって導きを確認し、平安のうちに歩み、幸いな人生へと導かれていきましょう。

(祈り)

信じる者を聖霊によって導いてくださる神さま。あなたは、私たちが聖霊の導きを間違えずに受け取ることができるため、祈ることを教え、教会を備え、御言葉を与えてくださいました。どうぞ、日々の信仰の歩みにおいて、聖霊の導きを祈り求め、それに従うことができるよう、助けてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

幕末に新島七五三太（しめた一のちの囊）が信仰に導かれたのは漢訳聖書を読み、「元始時神創造天地」（ハジメニ神、天地ヲツクレリ）とあるのを読み、創造主であるお方に目が開かれたからでした。

1952（昭和26）年、矢内原忠雄が東京大学総長に就任したとき、その演説で「神は宇宙万物を創造し、人類の歴史を摂理しておられる」と語りました。これに対して、ある教授が、「キリスト教の説教のような演説を就任式でしてよいのか」と不満を述べました。これを聞いた矢内原がその教授に「聖書を読んだことがありますか」と訊くと、教授は「ない」と答えたので、総長は「一回でも聖書を読んでから批判してください」と言いました。教授は、総長を批判するためにでしたが、聖書を読み始め、読むうちに、その深い真理に目が開かれ、信仰に導かれたとのことでした。

このように人々は、創造主である神に聖書を通して出会っています。日本は、他の国々と比べれば、温暖で豊かな自然に恵まれています。もし、聖書の声がなければ、自然界のさまざまなものを「神々」と考えるようになるのは当然かもしれません。しかし、自然の声もまた、創造主なるお方について語っておられることを知る必要があります。そして、それは神の言葉である聖書そのものに「聴く」ことによってなされるのです。



Penguin Club

www.penguinclub.net